

## 4. 各府県別の調査報告

### 1) 福井県

横山恵子 (NPO 法人 ウェットランド中池見)・河端良斉 (敦賀気比高等学校)

#### (1) 調査への取り組み

##### ①取り組みの概要

福井県の実行委員会は、2005年に大阪府の実行委員として調査に参加していた横山の提案を受け、NPO法人ウェットランド中池見のメンバーと敦賀気比高等学校教諭の河端の賛同を得て発足し、「タンポポ調査・西日本2010」に参加することになった。事前に県内の博物館・大学等で事務局を担ってもらえないか検討したが、様々な状況からかなわなかった。

こうした脆弱な調査体制のもとで行った2009年の予備調査は、サンプル数が500に満たなかった。この反省を踏まえて、2010年の本調査では調査地点(サンプル数)をいかに増やすかが課題であった。2010年には福井県立大学生物資源学部との連携の可能性が生まれ、実行委員会にも加わってもらったが、学会開催時期と重なり実質的な参加ができなかった。また、他のメンバーも様々な事情で思うように調査活動に関わることが困難となり、2009年の予備調査の課題を解決するには至らなかった。

なお、今回の調査に使用する調査票を置いていただいた施設等は次の通りである。

敦賀市内：市立図書館、西公民館、市民活動支援センター、野坂いこいの森、  
中池見 人と自然のふれあいの里

福井県内：福井県自然保護センター、福井県海浜自然センター、福井市自然史博物館、  
福井総合植物園プラントピア朝日、どんぐり倶楽部

##### ②調査説明会等の取り組み

実行委員会発足後すぐに、県内の博物館等に対して調査の説明と協力依頼を行った。また、自然観察指導員の集まりの機会に呼びかけ、調査の協力をお願いした他、NPO等の会報誌において参加を呼びかけ、調査用紙とカラーチラシを同封した。2009年4月26日に敦賀市の中池見湿地において、木村進、鈴木武両名を講師に迎え、タンポポ調査の現地説明会と調査実習を行った。

2010年も同様の働きかけを行い、2010年4月17日に敦賀気比高等学校附属中学校の生徒を対象にしてタンポポ調査の説明と実習を行った。この結果は、中池見湿地のタンポポ地図としてまとめられ、「中池見 人と自然のふれあいの里」に展示し、調査協力を呼びかけた。

##### ③福井県の在来タンポポに関する取り決め

福井県には、総苞の形や大きさがカンサイタンポポとは明らかに異なる二倍体在来種が生育している。環境省が行う「モニタリングサイト1000里地調査」のコアサイトとなっている敦賀市の中池見湿地において、植物相調査をする中でこうしたタンポポを別種とするのかしないのか、また呼び名をどうするのか判断がつかかぬていた。

福井県に生育するタンポポは生育する環境による変異が大きいことが特徴としてあげられるが、今回の調査のために行った2009年の現地説明会において、際だった特徴を有し種名が確定できるものを除き、二倍体在来種に関してはセイタカタンポポに統一するという取り決めを行った。

### (2) 結果の概要

#### ①種類組成と外来種の比率

2年間の調査には、学校参加を含め延べ78名の協力があり、届いた有効サンプル数は959であった(表1)。調査は限られた地域でしか行われておらず、面としての調査ができていないのは勝山市・越前市・敦賀市の一部で、その他は線ないし点の調査であった(図1)。

県内を分担するまでの調査体制を持たず、数人の熱心な調査者がいたものの、調査参加者の多くが調査可能な範囲でのみ調査を行うに留まった結果である。全県的な調査には、学校などの教育機関や公的機関の参画、支援を得ての取り組みが必要であることを痛感した。



図1 福井県の調査ポイント

表1 タンポポの種類組成とその比率

種類		個体数	比率 (%)
在来種	カンサイタンポポ	7	0.7
	セイタカタンポポ	143	14.9
	不明・その他の在来種 (二倍体)	16	1.7
	クシバタンポポ	5	0.5
	ヤマザトタンポポ	42	4.4
	不明・その他の黄花型在来種 (倍数体)	11	1.2
	シロバナタンポポ	28	2.9
	キビシロタンポポ	1	0.1
	在来種合計	253	26.4
雑種を含む外来種	セイヨウタンポポ	313	32.6
	アカミタンポポ	92	9.6
	その他の外来種	298	31.1
	外来種合計	703	73.3
不明 (タンポポ)		3	0.3
合計		959	100.0

#### ②在来タンポポの分布状況

調査地点やサンプル数が限られてはいたが、今回の調査で確認できたこともある。

まず、二倍体体在来種(セイタカタンポポ)は敦賀市以北で広く確認されたが、嶺南地域(若狭湾に面した地域)には僅かしかない(図2)のに対して、倍数体の黄花型在来種は全県に分布している(図3)ということがわかった。



図2 セイタカタンポポの分布



図3 黄花型在来種(倍数体)の分布

黄花の在来種は、この他にカンサイタンポポも確認された。

「タンポポ調査・西日本 2010」における福井県の役割の一つに、カンサイタンポポの分布域を確定することがあったのだが、先にも述べたように十分な調査が行えなかった。

ちなみに、今回の調査結果だけを見ると、カンサイタンポポの数は少なく、確認された地域も分散している（図4）ことから、カンサイタンポポの分布から外れているのではないと思われる。

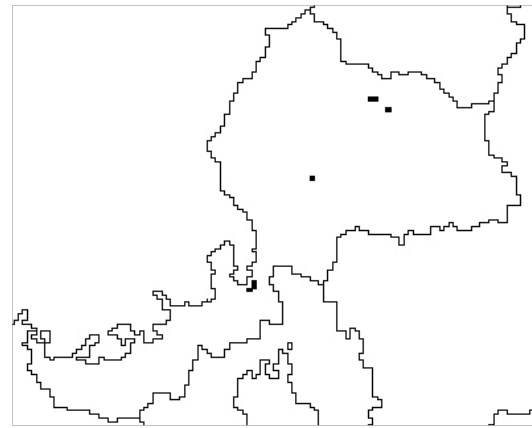


図4 カンサイタンポポの分布

しかし、この確定のためには嶺南地域を中心とする面的調査が不可欠であることが改めて示された。

次に白花型在来種であるが、予想以上に広い範囲に分布していることが分かった（図5）。

特筆すべきは、嶺南地域でしか確認されていなかったキビシロタンポポが、嶺北地域（木の芽峠以北）で見つかったことである。

キビシロタンポポは県域絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。

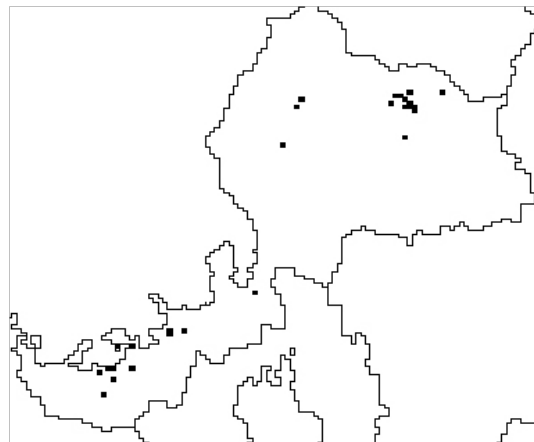


図5 白花型在来種（倍数体）の分布

### ③外来タンポポの分布状況

外来種は調査数全体の73%を占めている。

このうち、種名が判別された外来種のみで見ると、セイヨウタンポポが77%を占めており、県内に広く確認された（図6）。これに対して、アカミタンポポは、嶺南地域での確認が少ない（図7）という状況が見えてきた。

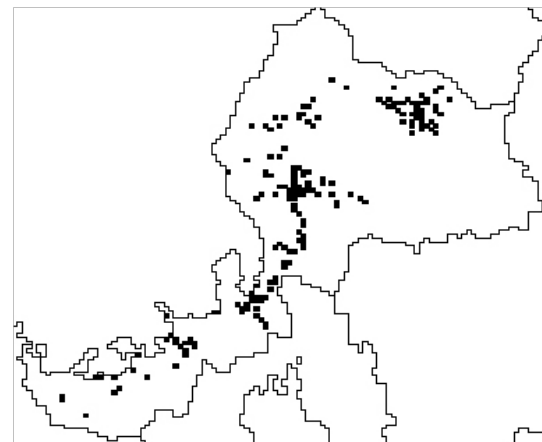


図6 セイヨウタンポポの分布

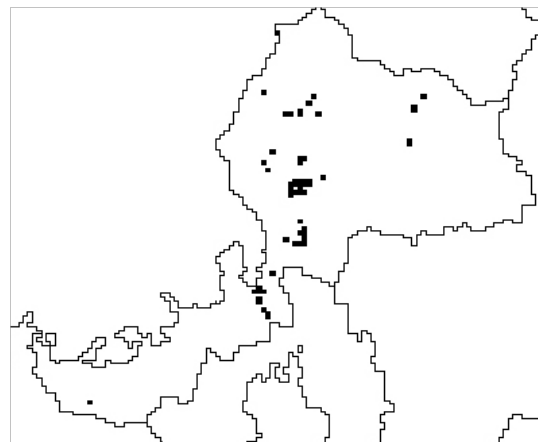


図7 アカミタンポポの分布

### ④タンポポの分布と環境

「タンポポ調査・西日本 2010」の調査目的には、タンポポを環境指標の一つに使うことも提案されていた。それは、在来種は定期的に管理をしている場所に多く分布し、外来種は攪乱によって新しくできた場所に多く分布するという考え方にに基づき、自然環境が豊かな場所には在来種が多く、都市化された場所には外来種が多いという見方である。

この視点に立って、今回の調査において調査メッシュ当たりの外来種の占める比率をまとめてみると、多くの場所で76~100%を示し、50%以下を示す場所は極めて少ない（図8）。

また、50%以下を示す場所をよく見ると、確かに自然豊かな場所にもあるが、街中にもみられ、当初の仮定とは無関係なタンポポの分布状況である。このことは、仮定が誤りであったと考えるのではなく、都市（街＝外来種）と田園（田舎＝在来種）という単純な二極対立で捉えることができないということを示していると思われる。

その一つの傍証として、タンポポの採取地点の環境がどうであったかを調べてみると、表2のようになる。

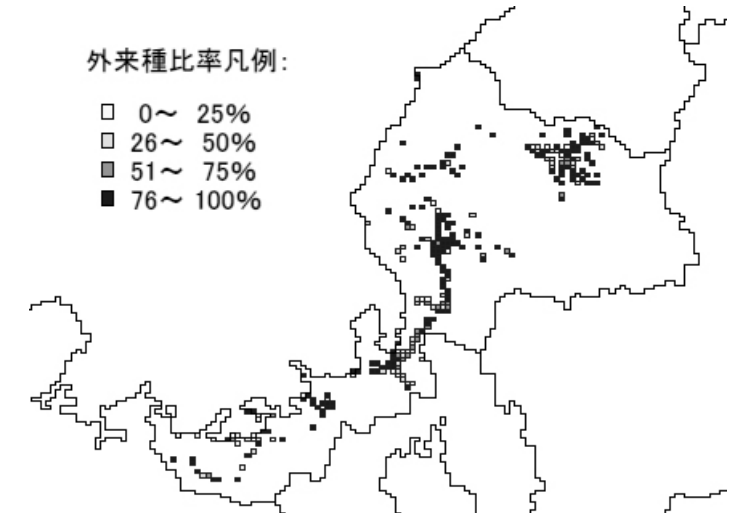


図8 外来種が占める比率

表2 採取地点の環境

環境	集計数	比率(%)
林・林縁	22	2.3
池の土手	0	0
堤防・河原	43	4.5
農地	78	8.1
社寺境内	12	1.3
都市的緑地	82	8.6
路傍・分離帯	673	70.2
駐車場・造成地	35	3.6
その他	14	1.5
合計	959	

農地での採取記録に注目すると、採取されたタンポポの数が都市的緑地で採取されたタンポポとほぼ同じ数である。農地でのタンポポの数が多くない理由を考えると、現在の農地は耕地整理という開発が行われてきた場所で、都市的緑地並みに整備されてしまったことを示していると思われる。

都市化の象徴として道路や下水道の整備状況があげられるが、田園地帯では耕地整理や宅地化という開発が行われており、こうした要因も加味した分析が今後必要ではないだろうか。

### (3) まとめ

- ・カンサイタンポポの分布は少なく、黄花在来種で最も多いのがセイタカタンポポで次いでヤマザトタンポポであった。
- ・シロバナタンポポは県内に広く分布し、嶺北地域でキビシロタンポポが初めて確認された。
- ・調査地点が少ないため断定することはできないが、セイタカタンポポとアカミタンポポの分布が嶺南地域で極端に少なく、地形上の条件や人為的な影響の違いによるのではないかと推察する。